

「The Handover in Iraq」

大宅 宏幸（宇都宮大学国際学部国際社会学科1年）

2004年6月28日、予定よりも2日早いという、予想外の展開ではあったが、ついにイラク暫定政権への主権委譲が行われた。本レポートでは、[ABC](#)、[CNN](#)、[BBC](#)、そして[アルジャジーラ](#)の4つの海外メディアの情報、記事を通してイラク主権委譲についてまとめ、そして私なりの考察を加え、論じていきたい。

イラク主権委譲とは？

フセイン政権崩壊後、イラク暫定占領当局 = the Coalition Provisional Authority (CPA) によって、イラク国内は暫定的に占領されていたのだが、今回の主権委譲では、その名の通り CPA からイラク暫定政府 = Iraqi Interim Government (IIG) へと、イラクの主権が委譲されたわけである。これによって CPA は存在しなくなり、長官のポール・ブレマー氏もアメリカ本国へと帰還した。また、形式的にはイラクの占領は終わりを告げたことになる。

イラク暫定政府を担うのは誰か

最も重要なポストである首相を務めるのは、イヤド・アラウィ氏である。氏は1945年に有力なイスラム教シーア派の富豪の家に生まれ、シーア派の学者としての教育を受けた。元亡命者で、同じくイラク亡命者によって構成されるイラク国民協定 (INA) のリーダーを務めていた。元来アメリカ、とくに CIA と親密な関係にあるが、最近ではアメリカ主導の占領部隊に対して批判的な態度も見せてきている。

続いて大統領のポストを占めるのは、ガジ・ヤワル氏である。大統領という存在は、名目上の、象徴上のものではあるが、政権内における意見形成において重要な役割を担う。氏は同じく元亡命者で45歳。アメリカにおいて教育を受けたモスルのスンニ穏健派の宗教指導者であり、アメリカ政府との強いつながりを持つ。しかしながら、最近ではアラウィ氏と同じくアメリカ主導の占領部隊に対して批判的な態度を見せてきた。また、副大統領には、シーア派ダワ党の党首であるイブラヒム・ジャアファリ氏とクルド人のロウシュ・シャーウェイ氏が就く。

イラク暫定政府は本当に主権を回復したといえるのか

このことに関しては多くの論議を呼んでいる。アメリカとイギリスは今回でイラクに主権が委譲された、とは言っているものの、実際にはこの政府はあくまでただの「暫定政府」であって、国の根幹をなす法律その他に対して修正を

加えたり、作成する権限は持っていない。しかし、アメリカ、イギリスとしては、今回の政府が外国軍部隊に対していくらか指揮権をもち、その意思によって、部隊を国内から撤退させることができる究極的権限を有していなければ、この政府を「主権を有する政府」とほとんど称することなど不可能だということをよく理解しているので、一応は、そうした権限を持たせてはいる。しかしながら、後の章で述べることになるが、国内の安全保障、治安の回復などの問題とあいまって、暫定政府としてはまだまだ外国からの支援を必要としているため、こうした権限を発動することは考えにくい。また、多くの部分において、アメリカに頼らざるを得ない面があるため、完全に他国からの干渉を排除した主権を有することになったとは言いがたい面があり、今回の主権委譲は名目上のもの、国民にむけたプロパガンダといっても過言ではない。

国内安全保障に対する権限　そして　治安の回復はどうなるのか

暫定政府は外国軍部隊に対して、国内から撤退させる権限を有している。しかしながら先ほども述べた通り、この政府はアメリカ及びその他の外国の部隊の存在による大きな支援によってどうにか成り立っている状態にあるため、その権限を行使することはまず考えにくいだろう。実はこのことが治安の回復という最大の問題に対して重要な影響を与えている。

治安の回復、それは国内最大の課題である。イラク国民がなにを一番望んでいるかといえば、治安の回復なのである。治安さえ良くなれば、誰もがそう考えている。では、はたして、今回の主権委譲に伴って、治安の回復が図られていく見込みはあるのだろうか。

結論から先に言えば、今後治安の回復が図られる見込みは、あまりないと考えられる。このことにはあるひとつの二律背反的要素がからんでいる。

占領当局はフセイン政権崩壊時に、中東地域では、かなり巨大で強力だったイラク国軍を解体してしまった。そのため、現在のイラク軍は編成、訓練、行動力といった面において、かなりの遅れをとっている。よって、自国の力で自国の治安を回復させるだけの治安部隊の力、警察の力が不十分で、どうしてもアメリカを中心とした外国軍部隊に頼らざるを得ない。しかしながら、外国軍部隊に頼るということは、それらの駐留を認めるということになり、国内におけるアメリカやその他の外国軍部隊に対する武装勢力の反発がますます強まり、治安がさらに悪化していくと予想されるのである。

アラウィ首相としてもなるべく外国の力を借りずに治安の回復を図りたいところであるが、それは難しく、やはりどうしても外国の力に頼らざるを得ず、それが結果として国内における武装勢力の反発を呼び、更なる治安の悪化につ

ながら，ということに対して大変苦慮しているようである．

国内における武装勢力，テロの脅威は最初予想していたものよりはるかに大きく，特に主権委譲後は，選挙などの重要な国民行事が行われていくために，更なる混乱が生じる可能性があり，より多くの外国軍部隊と，より長い駐留期間が必要となってくるのは明らかである．

もしサダムの軍隊を解体せず，そのままうまく新政権のもとで機能させることができているならば，このような治安上の問題の発生をいづらか防ぐことができているのではないか，という意見が，分析家のあいだで交わされている¹．イラク国軍を解体してしまったことは，占領当局の重大なミスであったといえよう．

アメリカ軍部隊，イギリス軍部隊，そしてその他の外国軍部隊はどうなるのか

これらの部隊は，暫定政権側からの正式な要請によって，また，国連安全保障理事会の承認を得て，今後も駐留を続けていくことになる．予定としては，だんだんとその役割を減らしてゆき，イラク治安部隊により重要な役割を担わせていく，ということになっている．しかし，先ほどの章で述べた通り，暫定政府としてはこれからも多くを外国軍部隊に頼らざるを得ない面があるため，アメリカ，イギリス，そしてその他の外国軍部隊はこれからも変わらずイラクの治安の回復等の面において大きな役割を担っていくのは間違いないと見てよいだろう．

外国軍部隊は今後どの程度駐留を続けるのか

国連の多国籍軍部隊の駐留に対する承認は，国民投票によって選出された完全なる新政府が発足する予定の2005年の終わりあたりには，満了となることになっている．つまり，このことは外国軍部隊が撤退するということを意味するが，やはり，何度も繰り返すようだが，新政府側からの要請によって，そのいづらかは，あるいはすべての部隊が期限を超えて駐留する可能性が高い．それがどの程度続くかは，まさに国内情勢の成り行き，すなわち，治安の回復等がなされていくかどうかにかかっている．現在の治安状況の現実を考えれば，1年や2年の先延ばしではすまないのは確実だ．

なぜ今回の新政府は単なる暫定政府であるのか，そしていつまで続くのか

今回の暫定政府とは，今年12月か，遅くとも来年の1月に行われる国民議会選出のための選挙までの，いわば留守を守ることを主な目的としてつくられたものである．予定からすれば，国民議会が組織されるまで今回の暫定政権は続くことになる．

選挙が行われる前までは、国内の多数派であるシーア派社会は、暫定政権にあまり多くの権限をもたせることを望んではいない。

暫定政府の後はどうなるのか ~選挙, 治安, 大きな懸念~

先程も述べた通り、今年12月か、遅くとも来年の1月に国民議会選出のための選挙が行われる。そして、「移行」のための政府が実際に法を作成する権限を得る。その後、イラク新憲法が作成され、2005年の秋に国民による直接投票が行われる。そして、2005年の終わりに総選挙が行われ、2006年の初め頃に発足するイラク新政権の選出がなされる、予定である。

が、やはりこれは予定にすぎず、この通りに進むかどうかについては、多くの懸念が残る。

まずなんといっても治安の問題がある。安全な状態でなければ、まともに選挙を行うことなど不可能である。現在のこの悪化の一途をたどる治安状況を考えれば、新政権発足のための民主的な選挙を、安全に、安定した状態で行うのはかなり難しいだろう。選挙者の登録、選挙運動、投票、集計、これらすべての選挙過程において、すでに日常的にこの国を混乱と恐怖におとしめている暴挙が襲う可能性が大きい。治安状況が悪ければ、国民としても安心して選挙に赴くことができないため、その参加の意思がそがれてしまい、余計に新政権発足のための準備は進まなくなる。

続いて、要人暗殺の懸念が残る。それは選挙中はもちろん、もしどうにか選挙が完了し、新政権が発足してからも考えられうる要因である。特にその人物が、アメリカとの連携を強めようとするならば、反対勢力の格好のターゲットと容易になりえる。こうした暗殺はむしろ選挙中だけでなく、現在のアラウィ政権においても十分考えられうる。彼らは、日常的に暗殺の脅威にさらされているのだ。

こうした治安、暗殺の問題は、新政府発足に向けての準備段階が進むにつれて、いっそう激しくなってくると予想される。いつ、どこで、また悲惨なテロ事件、暗殺事件が発生するかもわからず困惑し、治安の回復も遅々として進まないこの現状を考慮すれば、まず今後の予定通りには進まず、復興はどんどんと遅れていくのではないだろうか。イラクの未来は暗闇に包まれている。

ⁱ [BBC news : Analysis Iraq's military landscape](#) より